

情報学環所蔵大戦期プロパガンダ資料の デジタル・アーカイブ化

吉見俊哉・山本拓司・小泉智佐子

はじめに

情報学環吉見研究室では、1990年代半ば頃から旧社会情報研究所が所蔵してきた多くのメディア史資料、とりわけ幕末維新期のかわら版・新聞錦絵コレクションのデータベース構築（「ニュースの誕生」プロジェクト）や、両世界大戦期のプロパガンダ資料のデータベース構築（「戦争とメディア」プロジェクト）に取り組んできた。かわら版・新聞錦絵コレクションに関する画像データベースは、社会情報研究所が創立50周年を迎えた1999年までに完成し、CD-ROM版『ニュースの誕生』をその成果として刊行した。

これを引き継いだ「戦争とメディア」プロジェクトでは、旧社会情報研究所の戦時メディア資料を画像データベース化して保存・公開するとともに、テキストと基礎データ、版式データなどを重ねていくことで、データベースを核にして多様なメディア史研究の方法的蓄積が結び合わされていくような仕組みを構築しようとしてきた。以下では、この戦時メディア史料のデジタル・アーカイブ化の過程と現状について紹介したい。

本プロジェクトはおおよそ以下のような諸段階をとって進められている。

- (1) プロパガンダ資料の修復・デジタル化
- (2) プロパガンダ資料の形態調査
- (3) 基本画像データベース（FileMakerソフト使用）の構築（画像、基礎データ、テキスト、翻訳）
- (4) 印刷形式調査（版式、色数、色名）
- (5) 関連アーカイブ調査（アメリカおよび国内）
- (6) データの関連化とメタ・アーカイブのソフトウェアに関するデザイン
- (7) 戦時プロパガンダ関連資料の国際的アーカイブ・ネットワークの構築

1. 戦時プロパガンダ資料

情報学環には、A) 第一次世界大戦期にアメリカやヨーロッパで作成されたプロパガンダ・ポスター、およびB) 日中戦争、太平洋戦争期に主に日本軍が中国大陸やフィリピンで使用するために作成した宣伝用伝単（ビラ）・ポスターが所蔵されている。A) については、総数にして約660点ほどが所蔵されており、そのうちの3分の2ほどにあたる430点ほどがアメリカのものである。その他にカナダのものが約150点あるほか、フランス、イギリス、インド等のものが含まれる。来歴についてはいまだはっきりとしたことはわかっていないが、ポスター裏面に外務省情報部のスタンプが押されている事などから、情報学環の前身のひとつである新聞研究所時代に外務省からなんらかの経緯を経て持ち込まれたのではないかと推察される。

またB) は、日中戦争が本格化する昭和12年（1937）から第二次世界大戦中の昭和18年（1942）の間に作られたものが主で、中国大陸向けのものが約900点余り、フィリピン向けのものが約90点ある。一部、中国側が日本軍向けに作成したものも含まれている。多くが見本として作成されたものであり、ほぼ新品が帳面に綴じ込まれた状態で保存されている。ポスター大のものから、10センチ四方のビラ様のものまで、さまざまな大きさのものが含まれている。これらの資料は、戦後、情報局（当時）などから直接、持ち込まれたものとも考えられている。

2. デジタル・アーカイブ化作業

2.1 基礎データの作成

A)、B) の資料については、その性格の違いから、まず民間の撮影業者に資料の撮影とデジタル化を依頼して画像データを作成した上で、それぞれ独立したデジタル・アーカイブを作成している。



図1. 基礎データ入力画面

A)の資料については、タイトル、制作国クライアント名、制作者名、印刷所名、サイズなどの基礎データの他、ロシア語、ポーランド語、ヘブライ語、グジャラーティー語など全言語についてのテキスト入力と翻訳(部分訳)を行った。また、資料の来歴の手がかりになるであろう裏面の情報(スタンプ、手書き文字)についてもデータを取っている。

この一連の基礎作業を通じて浮かび上がってきた事実は以下のようなものである。まず、第一次世界大戦ポスターについては、アメリカ合衆国が国内向けに作成したものが多く含まれ、1917年の参戦からわずか数年の間に発行されたポスターには、募兵、募債、食料・物資の節約、戦意高揚を促す内容のものが含まれる他、移民のアメリカ化や女性の社会進出といった当時の社会事情がデザインやテキストに反映していることが判明した。

またB)の資料についても、資料の撮影とデジタル化を実施して画像データを作成し、寸法や資料タイトル、テキスト等基本データ、および資料への書き込みなどについての情報を入力した。資料の多くが「見本綴」として台紙に貼り付けられ、綴じ込まれた状態で保存されており、制作のプロセスについても何らかの情報を引き出すことができるのではないかと考えられている。一部については印刷された枚数についても記されており、宣伝活動の規模についての情報も得ることができる。本資料群の特徴は、中国語、フィリピン現地語、英語などで書かれた比較的大量の文字データが含まれていることである。とりわけ、900点余りにおよぶ中国語資料については、中国人留学生に文字データの入力を依頼するとともに、中国史・中国文学研究者にも参加を要請して、中国語の和訳作業を進め、英語への抄訳作業も行った。

2.2 印刷形式(版式)調査の実施

A)の資料に関する調査では、ポスターの印刷形式に関し、高度なレベルの技術的知識を有する専門家や長年印刷の現場に携わっていた人々が参加した。彼らの協力を得て数ヶ月にわたり、2グループに別れ、制作国別、クライアント別に分類したポスターを調査してきた。印刷物の技法や印刷プロセスを調査する方法の一つとして、ルーペ等で拡大して印刷面の網点を見る方法がある。今回の調査では主に25倍ルーペを用いて、使用されているインキの数と印刷面の様態等を精査、専門家相互に意見を出し合った。とくに、この調査過程そのものが貴重な印刷史上の知識を呼び起こしていく場となったため、現場の調査と議論の過程全体をビデオで記録する方法を用いた。

第一次世界大戦期のポスターは、階調や分色を職人の手や目によって行っていたものから、光学(写真術)を利用したものへと移行する転換期にあたるものである。したがって、本調査では絵と文字それぞれについて独自の分類項目(凸版、平版、凹版、孔版、描き版、写真製版、HBプロセス、網伏せ、部分網掛け等)を立て、版式を調査。使用された色数(インキ数)については、補助データとして色名のデータ入力も行った。



図2. 版式調査 データ入力画面

調査では、該当する分類項目のチェックだけでなく調査者たちのコメントも可能な限り拾い、データとして入力を行っている。調査結果を導き出すための根拠が示されると同時に、どの部分について何が議論されたかといったことや、そのポスターの特徴を知る手掛かりともなる。調査のプロセスそのものも情報として蓄積していることが、本調査の特色のひとつである。

また、以上の調査過程を記録したデータ全体のアーカイブ化を補完する意味で、高精細度で撮影したデジタル画像の利用の可能性を検討している。今回の調査は、研究者や技術者が集まって進めてきたが、高精細画像をネットワークを介して閲覧に供することで、継続的な検討が可能になる。

具体的な方法として現在想定しているのは、閲覧者が、画面上の網点の様子を確認しながら、メタ・データとして記録されている版式調査のプロセスと、国やクライアントといった一連の書誌学的情報も同時に参照しながら同じ調査に参加することができる方法、つまり、版式調査に関する一連の作業をコンピュータ上、またはモニタ上で再現し、データベースと連動させることを模索、検討している。

2.3 関連アーカイブ調査

情報学環と関連の深い他の戦時資料コレクションとしては、鳥取県の「祐生出会いの館」が所蔵する、大戦期のポスター及び中国大陸で使用されたポスター・伝単類のコレクション、京都工芸繊維大学および東京大学アメリカ太平洋地域研究センターが所蔵する第二次世界大戦期のアメリカのポスター・コレクション、函館市立図書館が所蔵する「満州」ポスター・コレクション、そして個人および企業が所蔵する2種類の伝単コレクションの存在が確認されている。本プロジェクトでは、これらについて調査を進めるとともに、両大戦期のプロパガンダ資料の

アーカイブ化が進んでいるアメリカの状況について2004年度に調査を行い、また同時に国内の関連アーカイブについての調査を行った。これらの現地調査の成果についても本デジタル・アーカイブに反映させようとしている。

【アメリカ調査】

第一次世界大戦期のプロパガンダ・ポスターを有し、それらについてデータベース構築を行っている組織として、University of Minnesota Libraries (Manuscripts Division)、Georgetown University Libraries (Joseph Mark Lauinger Library)、The Museum of the City of New Yorkを訪問、調査した。実際にデータ構築に携わった人物たちと面会し、データベース構築の実際について、データ項目の立て方、使用ソフト、ネットワーク構築、運営管理の方法を聞いたほか、資料の保存・公開状況、来歴等についても聞き取りと意見交換を行った。

【国内調査】

国内にある同様のコレクションの視察として、鳥取県の「祐生出合いの館」、および京都工芸繊維大学美術工芸資料館のコレクションの視察を実施した。両施設では、資料の来歴および本学環コレクションとの比較、資料の保管・公開方法について意見交換を行った。

2.4 研究会の開催

プロパガンダ資料の基礎調査と並行し、本プロジェクトでは「戦争とメディア」研究会を開催し、他機関で進行中の同様のコレクションをめぐる作業との情報交換を進め、また戦争・メ

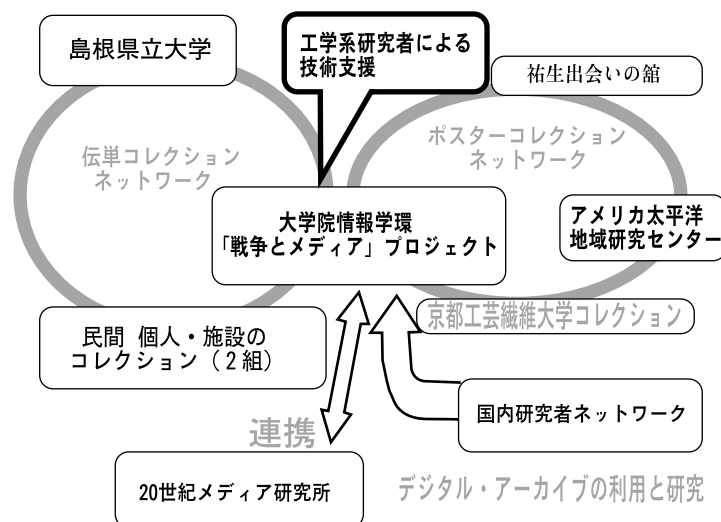


図3. 国内諸機関との情報交換とネットワーク図

ディア・記憶をめぐる連携的な研究体制の構築について議論を重ねてきた。

研究方法についての議論としては、2002年に日仏会館で開催した国際シンポジウム「Between War and Media (集中討議：戦争とメディア)」において、戦争とメディアの関係の歴史的、視覚的、批判的な解明を試みた。ここでの成果はすでに書物[3]として発表しているが、同じメンバーによる研究会を継続している。また早稲田大学の山本武利氏を中心とする20世紀メディア研究所は、20世紀におけるプロパガンダ事業について研究を進めている。今後、このような他のプロジェクトとの連携体制を構築していきたい。

3. メタ・アーカイブへの構想

情報学環には、本プロジェクトがアーカイブ化を推進する、第一次世界大戦期のプロパガンダ・ポスター、および日中戦争・太平洋戦争期の伝単・ポスター・コレクションの他、前述のかわら版や新聞錦絵、日露戦争期にさかのぼる新聞の号外コレクションなどが所蔵されている。これらは一枚刷りの視覚メディアとして捉えることが可能である。すなわち、一枚の刷り物のなかに瞬間的に人目をひきつける視覚的諸要素が配置されているという意味で、形式的な共通性を有している。この「一枚刷り」コレクションを、多様な形態をとる諸メディアの中に位置づけた上で、情報学環のデジタル・アーカイブ化のプロジェクトでは、異なるコレクション群を相互に結びつけて連環化していく仕組みを開発しようとしている。

3.1 横断的な検索システムの構築

情報学環が旧社会情報研究所から引き継いで所蔵する一枚刷り資料コレクションは、以下の通り。

- 1) かわら版コレクション
- 2) 新聞錦絵コレクション
- 3) 新聞号外
- 4) 日中戦争・太平洋戦争期 伝単・ポスターコレクション
- 5) 第一次世界大戦期プロパガンダ・ポスターコレクション

これらの異なるタイプの一枚刷りの資料について、次の横断的な検索システムを構築する必要がある。まずは全資料のテキストデータの入力と翻訳、現代文の読み下しがあるので、言語を媒介にした横断的な連想検索システムの構築を構想している。これについてはすでに、島根県立大学、神奈川大学の戦時資料デジタル・アーカイブを横断するシステムの構築に着手した。今後は、各々のイメージ画像に関する何らかの方法での横断的な検索システムの構築、さらには各々のアーカイブでの資料分析の方法論において横断化可能な認識論的構造の発見を構想し

ている。

3.2 分析アーカイブのトライアド構造

構築中のデジタル・アーカイブには、素材としての資料データを集積・分類・整理するだけでなく、戦時プロパガンダ研究における分析の方法論や資料の認識論、基礎概念をデータとして包摂させる。これら2つのレベルを相互に結びつけ、成長するアーカイブにしていくことを構想している。そのため、以下の3つの分析次元を設定するのが有効である。

I) 印刷技術次元の分析

前述の第一次世界大戦期ポスターにおいて実施したように、印刷技術の面からの分析データの書き込み。印刷をめぐる蓄積された知識の集成

II) 表象内容次元の分析

ポスターやビラの図柄とメッセージを、記号論やイコノグラフィー的側面から解読

III) 社会歴史的文脈の分析

ポスターやビラなどの生産と消費のプロセス、プロパガンダ機関、社会的背景などの分析

上記3つの分析的作業を進める上では、国内外の社会学、歴史学、政治学、メディア論、美術史、デザイン史などの諸機関、研究者による学際的な研究を進めることが不可欠である。上述の印刷技術のデータについても、現在かかわっている国内の技術者や研究者だけでは解明しきれない技法やプロセスが多く、幅広い研究者の参加が必要である。数多くの研究者の閲覧に供し、調査結果を絶えず更新することができる仕組みを構築しようとしている。また、そのようにして構築されたデジタル・アーカイブに、世界各地の研究者や学生がコメントを加えていくことができるような仕組みも考えていかなければならない。

21世紀のデジタル・アーカイブは、単にデータの蓄積・処理技術やプレゼンテーション技術を競うだけであってはならない。学問の根底には対象と研究主体の間で相互的に分析概念が洗練されていく過程が必ず存在し、デジタル技術の発達の中で、学問総体とアーカイブとの重なりが大きくなっていく以上、我々はそのようなデータをめぐる分析の学問的な方法概念を深化させていく新しいデジタル・アーカイブ、方法論や研究プロセスのデジタル・アーカイブを創造していく必要がある。

参考文献

- 特集 戦争とメディア, 現代思想, vol.30, No.9, 2002.
- 西谷修, 港千尋, 吉見俊哉: 戦争プロパガンダと記憶, Inter Communication, No.54, pp.13-34, 2005.
- 山本拓司, 小泉智佐子: 戦争の視線 第一次・第二次世界大戦の戦争プロパガンダ資料, Inter Communication, No.54, pp.5-12, 2005.



吉見俊哉 (よしみ しゅんや)

1957年生まれ。東京大学大学院社会学研究科単位取得退学

〔専攻領域〕社会学・メディア研究・文化研究

〔著書・論文〕

『万博幻想』(筑摩書房、2005年)

『メディア文化論』(有斐閣、2004年)

『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』(人文書院、2003年) など多数

〔所属〕東京大学大学院情報学環

〔所属学会〕日本学術会議、日本社会学会



山本拓司 (やまもと たくじ)

1970年生まれ。慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学

〔専攻領域〕歴史社会学

〔著書・論文〕

「近代日本と学校体操—その導入過程をめぐって」『三田社会学』7号(三田社会学会)、57-70頁、2002年

「国民化と学校身体検査」『大原社会問題研究所雑誌』488号(大原社会問題研究所雑誌)、30-43頁、1999年

〔所属〕東京大学大学院情報学環

〔所属学会〕日本社会学会

小泉智佐子 (こいずみ ちさこ)

1977年生まれ。立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻修了

〔専攻領域〕アーカイブ、視覚文化論、アメリカ文化研究

〔所属〕東京大学大学院情報学環技術補佐員